

湯等のごとく、法式古法新規の事多端なるべければ、香道をふむ人兼て其辨別なくば有べからず。

今世香會の作法みだりなるよし、
執心うすく、不嗜の故と知べし。

一 香道具品々、盤人形馬花紅葉箭磨源氏香の圖等は、十種の要具なれば、後附に圖畫して初心のたよりとす、是も又略にしたがふのみ。

一 香道に古法の制ある事、あらかじめ知ずば有べからず、其筵に入人、此趣をまほるべし。

一 其身衣裳に薰じ、又革の衣類を著し、出座する事。

一 香一組相濟うち、自餘のはなしいたす事。

一 三息五息の外、永聞し、また香爐を取戻しきく、并入たる符を取かゆる事。

一 他人とさ、やき相談して符入る事。

一 香一組おはらざるに、烟草茶并菓子など食する事。

一 香の半に座をたち、用事と、のふる事。

一 戸障子のたて、明言語起居、いづれもまづかならざる事。

右條々、堅相たしなむべきものなり。

此外常に用意の事、數多あれ共別記に譲りて略し畢ぬ。

〔夏山雜談〕五香ノ式ハ、十炷香ヲ本トシテ、サマトノ法ハ皆ノチニイデキタルナリ、略源氏香

ノ圖ハ、最初ヨリ其圖アルニアラズ、五炷ノ香ヲ試オボエタル次第ヲカキシルスニ、自然ト其圖イデタルナリ、圖ノツクリヤウ、大概左ノゴトシ、

源氏香ハ、香五炷也、五炷ノ内、一ノ香五包、二ノ香五包、三ノ香五包、四ノ香五包、五ノ香五包、合二十五包ヲ打交テ、何レナリトモ、其内五包トリ出シ、香本ヨリ一包ヅ、タキ出ス、譬バー一二三四